

16th ICFIA 2010 へ参加して

静岡大学教育学部 栗原 誠

1. はじめに

2010年4月25日(日)から30日(金)まで、タイのパタヤで第16回フローインジェクション分析国際会議(16th ICFIA 2010)が開催されました。私は、ICFIAには今回が初めての参加になります。初参加にも関わらず、JAFIA委員長の酒井先生から報告記を書かないかと誘われ、適任とはどうも思えませんでした。時にはそういう初心者による報告記もあってよいだろうと勝手に解釈をして書かせて頂くと思います。九州大学の今任先生から依頼のメールを頂いた後、過去の報告記を読ませて頂くと、筆者の方々がそれぞれの視点で書かれていることがわかり、2009年のFlow Analysis XI報告記も初参加の庄司貴君によるものでした。本稿にて私の感じたままを書かせて頂くのも過去の踏襲としてご容赦願えればと思います。



写真1 Nong Nooch Tropical Gardenにて筆者(左)と Manuel Miró 氏

会議は、ビーチリゾートとして知られるパタヤのGarden Sea View Resort Hotelを会場に、4月26日の朝から30日のお昼までに、招待講演2件、口頭発表44件、ポスター発表145件、計191件と多数が行われ、活発な討論が行われました。このうち24件が日本からの発表でした。参加者は、20カ国から180名の参加があり、その内日本からは25名と同伴者2名でした。タイからの参加者は108名とかなり多数の参加があり、タイにおいてFIAがたいへん広がりを見せていることが感じられました。

日本からの参加者(敬称略)は次の通りです：Anusara Thepchak(神奈川工科大、学生)、飯田泰広(神奈川工科大)、生月俊也(神奈川工科大、学生)、今任稔彦(九大)、上田実(愛知工大、学生)、大下浩司(吉備国際大)、大島光子(岡山大)、小熊幸一(千葉大)、川村邦男(大阪府

立大)、栗原誠(静岡大)、酒井忠雄(愛知工大)、椎木弘(大阪府立大)、同伴者、庄司貴(横浜国大、学生)、善木道雄(岡山理科大)、田端正明(佐賀大)、手嶋紀雄(愛知工大)、床波志保(大阪府立大)、同伴者、長岡勉(大阪府立大)、長嶋久美子(神奈川工科大、学生)、中村栄子(横浜国大)、Md. Abul Hashem(熊本大)、牧知治(九大、学生)、三宅麻代(九大、学生)、本水昌二(岡山大)、和田宣洋(岡山理科大、学生)

2. タイ入国とタイの情勢

タイへ渡航する前から、また会議開催中においても新聞やテレビでタイの情勢が多数報道されていました。タイのタクシン元首相を支持する、いわゆる「赤シャツ」(red shirts protesters)とよばれる反政府勢力が、現政権のアピシット首相に解散・総選挙を求めて、バンコク市内の中心部を占拠し集会を続け、タイ国内において非常事態宣言が発令されていた問題です。特に、会議終了後の5月には政府が反政府派の強制排除に動き出し、急激に緊張の度合いが高まり、バンコク市内は激しい戦闘となり多数の死者も報道されました。渡航前に外務省の海外安全情報を確認した際も、タイにおいていくつかの危険情報が出されており、バンコクは「注意してください」から会議開催直前になって「渡航の是非を検討してください」に危険情報のレベルアップが行われました。そうした状況のため、タイのICFIA実行委員会のDuangjai Nacapricha先生から、混乱はバンコク市内の一部であり、それ以外の地域は平穏であるというメールが参加者宛に送られ、それを読んで安心したのは私だけではなかったろうと思います。

また、ICFIAの開催1週間前には、アイスランドにおける火山噴火のためヨーロッパの航空網が麻痺させられる事態も起き、世界的に混乱する中で開催にこぎつけたという印象です。

そうした中での開催となった16th ICFIA 2010 Pattayaでしたが、タイへ入国するとスワンナプーム国際空港(Suvarnabhumi International Airport)は多くの渡航者でにぎやかであり、パタヤのホテルも多くの観光客でにぎわっていて、まったく平穏な状況でした。空港では、私は最初に2年前までタイから静岡大学へ留学に来ていた方に再会することができ、またICFIAの現地の実行委員の方が2階建てのバスで迎えに来てくださっていて、迷うことも無くホテルに到着することができました。

タイ語をまったく知らない私は、しばしば言葉の上での

<報告>

戸惑いを感じましたが、Suvarnabhumi International Airport の読み方はその典型的な例と言えます。この国際空港は2006年9月に新しくオープンしたタイの表玄関であり、日本語で書くと「スワンナプーム国際空港」となります。タイ語の発音は日本語にはないものが多く、正しく表記することはできませんが、タイ語の発音もおよそこれに近いものようです。Suvarnabhumi というつづりとスワンナプームという読みを関連付けるのが、日本人である私にはかなり難しく、タイの学生さんらに何度もなぜこのつづりがスワンナプームなのかと聞いて困らせたりしてしまいました。いろいろ聞いてみると、タイでは現在のタイ語の発音で必ずしも英語の表記が決まったわけではないようです。仏教国であるタイ語の起源は、古代インドのパーリー語やサンスクリット語で、それらの名残のある古いタイ語の発音が英語表記に用いられているため、タイの地名や人名、建物名称の英語表記が現在のタイの発音と一致しないようでした。

3. ウェルカムレセプション

ICFIA は、25日夕方のウェルカムレセプションから始まりました。タイは、雨季の始まる前の4月が1年を通して最も暑く、40℃を超えることがあり、タイの夏休みは4月であると聞いていましたので、どんな暑さかと心配していました。ウェルカムレセプションは、ホテルのプールの脇で、プライベートビーチのすぐそばで行われました。そうした場所のせいもありタイでの最初のイベントは、それほど暑さを感じることもなく快適なものでした。ドリンク類は全てソフトドリンクで、アルコールに弱い私はいへん助かりましたが、タイではパーティでもアルコールを飲まない方が多いようで、これもタイ流のようでした。ステージでは、実行委員会の Duangjai Nacapricha 先生がたいへん陽気に司会を勤め、まずは前回のスペインでの会議の様子等がビデオで紹介されました。会場の雰囲気は、ホテルの写真をご覧頂ければと思います。今回の会議では、タイの8つの大学の研究者による研究プロジェクトである“High-Throughput Screening / Analysis: Tool for Drug Discovery, Environmental Monitoring and Food Safety”からの発表もあるということで、Director の Orawon Chailapakul 先生の紹介と挨拶、そして Chair の Gary D. Christian 先生の挨拶、奥様の Sue Christian さんからの手紙の紹介やタイダンス等と盛りだくさんの内容で進行しました。日本からの一部の方以外に知った人のいない私でも楽しむことのできるパーティでした。

4. コンファレンス

会議がはじまると実行委員会のタイの方々非常にアクティブであり、またこの会議の成功にたいへん多くの努



写真2 ウェルカムレセプションの行われたプール周辺



写真3 Garden Sea View Resort Hotel

力を惜しまずに注いでいることがさらに強く感じられました。Opening Lecture は、Gary D. Christian 先生による“‘The Evolution of Flow Injection Analysis’”と題したご講演であり、次いで今任先生のご講演から口頭発表となり、たいへん興味深い講演が多数行われました。30日の Closing Lecture は、Victor Cerda 先生による“‘Some New Contributions to Flow Analysis: Current and Future Projects’”でした。講演に関して詳しくは、16th ICFIA のホームページにプログラムが公開されていますので、それらをご覧頂くことができます。また、Talanta と JFIA において特集号が企画されていますので、発表された研究の詳細は、是非そちらをご覧頂ければと思います。また、「ぶんせき」誌7月号のインホームション欄に手嶋先生による報告記が掲載予定ということですので、そちらも是非お読み頂ければと思います。ここでは私の印象について少し述べさせていただきます。講演内容は、測定の原理や用いている技術や反応等においてたいへん多岐にわたっており、また様々な応用を目指す研究もあり、それぞれの研究者が新しい発想により活発に探求を重ねていることが強く感じられました。新しい発想による情報が基礎から応用まで幅広く得られるのは、参加者にとつ

<報告>

て大きなメリットだと思います。ポスター発表は、26日、27日、29日の3日間行われました。学生を対象とした優秀ポスター賞が設けられ、最終日30日のクロージングセレモニーで13名に授与されました。

5. エクスカーション

コンファレンスのちょうど中日に当たる4月28日(木)に、デイ・エクスカーションとしてタイ観光に参加しました。この一日だけでも、かなりタイを満喫することができる充実した内容で、ここにもタイの実行委員会の力の入れようが感じられました。午前8時30分にバスでホテルを出発し、まずはNong Nooch Tropical Gardenへ。ここは、広大な熱帯植物の西洋風公園で、タイダンスショーやエレファント・ショーも楽しめます。パタヤ市内もそうなのですが、この公園内でも海外からの観光客がほとんどで、ヨーロッパ系、インド系、韓国系と非常に国際色豊かでした。次にブドウ畑の中に突然現れる、山の壁面に巨大な仏陀が描かれたBuddha Mountainを通過して、Suphatra Landへ向かいました。ここも広大な公園で、熱帯フルーツが食べ放題という場所です。タイでは、King of fruits がドリアンで、Queen of fruits がマンゴスチンということです。手嶋先生からドリアンは臭いがすごいと脅されて恐る恐る手に取りましたが、新鮮だったせいか食べることができました。

エクスカーションの最後は、圧巻のティファニーショーでした。タイはニューハーフの多い国として知られていますが、まさにその美人ニューハーフの絢爛豪華なエンターテイメントでした。ティファニーは、ニューハーフの美人コンテスト、「ミス・インターナショナル・クイーン」の会場としても知られているようです。

6. コンファレンス・パーティー

4月29日の夜にはコンファレンス・パーティーが行われ、タイの音楽と伝統的な踊り、手嶋先生優勝の鶏鳴きまね競争(?)、田端先生の活躍された目隠しをしての利き酒ならぬ利きウィスキー等と挙げきれないほどのイベントで楽しませていただきました。その後、JAFIAによるFIA学術賞の表彰が行われ、JAFIA委員長の酒井忠雄先生より、Petr Solich先生(Charles Univ., Czech Republic)とDuangjai Nacapricha先生(Mahidol Univ.)に贈呈されました。

7. おわりに

印象に残ったことは何かと考えると、人との交流というのが一番に挙げられます。なんのことはないことですが、エクスカーションの後に酒井忠雄先生、本水昌二先生、田端正明先生、善木道雄先生、大島光子先生、手嶋紀雄先生、上田実君らとともに夕食を地元のレストランに

食べに出かけましたが、たいへん話しやすい雰囲気でもみなさんが交流を大切にしていることがたいへん深く印象に残りました。こうしたよい雰囲気を保っていることが、FIAが日本において、またいろいろな国々で発展を続けている一因とも思えました。交流を大切にする雰囲気は、日本以外の様々な国のFIA研究者にも共通なことで、私も様々な国の方と交流を持たせて頂き、たいへん有意義な国際会議であったと感じています。

今回の会議への参加と発表を無事に終えることができましたのは、JAFIA委員長の酒井先生をはじめとする日本人参加者の方々、またタイの実行委員会の方々の親切な援助のおかげです。さらに様々な討論をして頂いた多くの方に対しましても、心より感謝を申し上げます。

次回の17th ICFIAは2011年7月3～8日にかけてポーランドのクラクフ(Kraków)で開催されるということです。



写真4 JAFIAの酒井委員長からPetr Solich先生へのFIA学術賞の贈呈



写真5 コンファレンス・パーティーにおける記念撮影